

国指定特別天然記念物「田島ヶ原サクラソウ自生地」の情報を中心に、さいたま市の花サクラソウを紹介する広報誌

# さくらそう通信

VOL.28  
2014.3

さくらそう通信では、全国のサクラソウ保護の取り組みをご紹介しますが、今回は青森県三陸復興国立公園の種差海岸にあるサクラソウ自生地の保全活動についてご紹介します。東日本大震災により被害を受けたサクラソウの救出に取り組む、青森県立名久井農業高校植物研究グループの活動は、数々の賞を受賞し評価されています。活動を指導されている木村亨教諭にご寄稿いただきました。

## ミッションはレスキュー ～青森県種差海岸のサクラソウ保全活動～



2011年3月に発生した東日本大震災。大津波は青森県八戸市の種差海岸にある絶滅危惧種サクラソウ自生地を飲み込んだ。

チームフローラフォトニクスは青森県立名久井農業高校の植物研究グループで、日頃から10名前後の女子生徒たちが中心となり、植物と光の関係を研究している。しかしサクラソウが津波による塩害の危機にあることを知った彼女たちは、取り組んでいた研究をすべて休止し、救出に立ち上がった。

しかし当時、海岸を管理していた青森県は、県立自然公園であることを理由に自生地の立ち入りを認めなかった。それでも塩害のデータを集め、あきらめずに訴え続けた。そんな彼女たちのところに県知事から救出指令が届いたのは、震災から2ヶ月たった5月上旬であった。サクラソウの開花期は5月いっぱい。そこで地元の自然保護団体の案

内ですぐに自生地に向かい、群落規模などの調査とともに人工授粉を行い採種に成功した。採種は万が一の絶滅に備え、自生地外保護を行うためであり、この様子はテレビや全国紙に取り上げられ全国から激励のメッセージが届いた。



2011年震災被害調査

そんな彼女たちが心から笑顔を見せたのは震災から1年経った2012年5月。サクラソウが次々と芽を出し、開花した時である。一度も口にできなかったが、おそらく全国からの期待がプレッシャーとなっていたのではないかと想像する。彼女たちは2012年も青森県と連携して塩害被害の回復状況を調査している。チームはいくつかある群落の中から1つ選んで継続調査しているが、震災の翌年は株数320と約30%増えている。



2012年生育調査

一般に土壌酸素濃度は深くなるほど減少する。さらに海水をかぶると土壌粒子が結合するため通気性が悪くなり根腐れをおこす。しかし種差海岸では表土こそ塩害により酸素濃度が低下しているにもかかわらず30～50cmの深さでは逆に高いことが分かった。おそらく長年積み重なった腐葉土により土壌内に隙間が確保され、根腐れを防いだのではないかと考えている。その年、サクラソウは種差海岸の自然が守ったと彼女たちは青森県に報告している。この年、チームはストックホルムで開催された青少年水大賞に日本代表として出場し、2年間取り組んだサクラソウの救出活動も紹介している。

チームの活動はこれで終わらなかった。2013年、種差海岸は三陸復興国立公園に指定された。種差海岸は豊かな自然が魅力であり、海岸に咲くサクラソウも観光資源である。そこでこれからもずっとこの地に咲かせるために長期的保全研究へと舵を切ったからである。



海岸全景（自生地は丸印内）

保全研究を行うにはまず、自生地のおかれている環境を知ることが大切である。しかし気象庁に問い合わせても海

岸のデータはないとの回答。そこで1年間かけて気温や湿度、競合植物や昆虫、サクラソウの光環境や土壌水分など大量のデータを収集し分析を行った。



光量の測定

その結果、海岸特有のヤマセという偏東風により気温が低く、訪花昆虫が活動できる期間が極めて短いこと、開花が終わるとハマボウフウなどの葉の広い海浜植物によって覆われサクラソウに届く光量がわずか4%まで低下し、光合成が思うようにできないことなどを明らかにした。

案の定、結実率は10%にも満たず、自生地は数十のクローン群落が生息して構成されていることがわかってきた。クローン集団は寿命になると笹や竹のように突然姿を消す。種差海岸のサクラソウは静かに絶滅の道を歩んでいたのである。

またチームは聞き取り調査からサクラソウ減少の原因につながる興味深い情報も手に入れている。かつて種差海岸は馬の放牧地で、大きなサクラソウ自生地があった。しかし昭和30年代頃から放牧が減り、草原は原野化し、さらに防風林として松を植えたため明るい草原は暗い林となってしまった。サクラソウもマルハナバチも明るい草原に暮らす生物である。ハチの姿が見えなくなったこと、サクラソウが暗い林から逃げるように明るい海岸に移動してきたことなどを考えると、すべての原因は人間と自然との関係が希薄になったからだと考えられる。

そこで2014年からは、保全生態学の専門家と相談しながら自生地内の群落を活用した人工授粉による新しい個体作りに挑戦している。



2014年人工授粉